

東洋文庫

井上靖

続
しろばんば

中央公論社

続しろばんば

昭和三十八年十一月二十日初版印刷
昭和三十八年十一月三十日初版発行

著 者 井 上 靖

装幀挿画者 小 磯 良 平

発 行 者 宮 本 信 太 郎

印 刷 者 山 田 一 雄

挿画印刷者 大 熊 整

発行所

中央公論社

東京都中央区京橋二ノ一

電話 五九二一―九

振替東京三四

定価 四六〇円◎

続
しろ
ばん
ば

一 章

村の人たちが御料局と呼んでいる帝室林野管理局天城出張所の所長さんが替って、新しい所長さんが赴任して来る日、湯ヶ島の宿部落の子供たちは何となく落ち着かなかった。こんど来る所長さんには六年生の女の子と三年生の男の子があるということが、既に部落中に伝わっていたので、いかなる少年と少女が姿を現して来るかということが、子供たちの関心の的であった。五年生の洪作や四年生の幸夫たちは、一年生や二年生ほどそのことに興味は持たなかったが、それでも自分たちと同じ部落に住み、自分たちと同じ小学校へ通う少年と少女がやがて、この村へ姿を現すと思うと、多少気にかからないこともなかった。

いつか夏休みも終り、あと数日で二学期が始まるという時であった。毎年のように暦に立秋という文字が現れると、きちんと計算でもしていたように、その頃から陽の光は目立って弱くなり、どことなく秋の気が山間の部落の空気の中に感じられ始めたが、この年は特にそれが強かった。暦の上で秋が立ってからは、すっかり暑気が落ちて、朝夕は冷え冷えとした秋の風が吹いていた。村人たちは一ヶ月早く秋がやって来たと言い、もう少し照りつけて貰わないと、米の稔りに差し障りがあるだろうと心配していた。

併し、御料局の所長さんの赴任して来る日は、突然夏がぶり返して来たように、朝から強い陽の光の降っている暑い日であった。洪作は土蔵の窓際の机に對^{むか}つて宿題の残りをやっていた。小川の流れの音に混^まつて、蟬^{せみ}の啼く声が聞え、時々子供たちの騒ぐ声の中から聞えて来た。そしてその子供たちの騒ぐ声は時々土蔵の窓下まで近付いて来て、そしてその度に何人かの洪作を呼ぶ声が、洪作の耳に届いて来た。

——洪チャ、マダカ？ 洪チャ、マダカ？

それは合唱の一節でもあるように独特の調子を持っていた。いかに自分たちは楽しく遊ぶためにお前を待っていることか。家の用事か、勉強か、何か知らないが、そんなものは放り出して一刻も早く出て来るがいい。そういう意味であった。この歌でも合唱するような呼び出しは、浮き浮きしたものと、同時に妙に切ない一種の調子を持っていて、この呼び出しをかけられると、大抵の子供はその誘惑に耐えることはできなかった。

洪作は五年になった時から、この呼び出しの誘惑に耐えるように自分を鍛えていた。毎日のように部落の子供たちと遊び廻^{まわ}っているのは、到底あと一年半ばかり先に迫っている都会の中学の入学試験に合格することが望めなかった。五年になってから洪作は、自分だけは他の子供たちとは違って多少勉強しなければならぬと思っていた。

併し、厄介なのはおぬい婆さんだった。彼女は口では時々勉強しなければいけないというようなことを言っていたが、それでいて、いざ洪作が机に對^{むか}つて勉強している姿を実際に見かけると、

「洪ちゃ、遊んでおいで。そんなに精出して勉強ばかりせんでもええが」

そんなことを言つて、勉強を打ち切つて遊ぶことを勧めた。勉強している洪作を見るのが痛ましくて堪らぬといった風であった。そんなわけで、洪作は容易なことでは机に對^{むか}えなかった。絶えず外からは子供たちの呼

び出しはかかって来たし、家の中ではおぬい婆さんが遊んでおいで、遊んでおいでを繰り返した。

この日も、洪作は外からの呼び出しの誘惑に一生懸命耐えていると、例に依って、二階へ上って来たおぬい婆さんが、

「もう総理大臣にも博士にもならんといええが。――遊ぶこっちゃ。遊ぶための夏休みだもの、洪ちゃ、遊んでおいで」

と言った。

「ううん、お昼まで勉強するんだ」

「勉強せんでも、洪ちゃはできる」

「できるもんか」

「この間も、学校の先生が、ほら、何とか言った若い代用教員があらうが、あれが洪ちゃのことを褒めていた。

――ちょっとだけ遊んでおいで、そしてまた勉強したらええが。曾祖父おおじいちゃだって、こんなには勉強せなんだ」
おぬい婆さんは言った。

「じゃ、遊んで来る」

洪作は言った。遊びたいのは山々だった。

洪作は戸外へ出ると、麦藁帽をかぶって、幸夫たちを探しに往来へ出た。どこにも子供たちの姿は見えなかったが、行先は大体見当がついていた。へい淵へ泳ぎに行っているか、その附近で川を堰せきいて魚を獲っているかに違いなかった。洪作がへい淵へ行くために上の家の横手かみの道を歩き出した時、遠くで子供たちの喚声の上るのが聞えた。駐車場の方からであった。この年の春から下田街道しもたかじょうをもバスが走るということだったが、春に

なっても、夏になっても、バスの走りそうな気配はなく、依然として馬車がこの附近の唯一つの交通機関になっていた。

洪作は、子供たちの喚声が駐車場の方で聞えたことで、新しい所長さんの一家がこの部落に到着したに違いないと思った。洪作はへい淵行きはやめて駐車場の方へ家の前の坂道を降りて行った。すると果して、何人かの部落の下級生たちが駈けて来た。

「洪ちゃ、来たぞ。あまっちょが来たぞ」

一人は洪作に報告してから、

「ここに待ってて、石ぶつけるべえか」

と言った。知らない少女が馬車から降りたことで、彼等は明らかに昂奮していた。

「石ぶつけてから、俺が行って小突いてやる」

もう一人の裸の一年坊主が言った。この方も息を弾ませて、徒らに眼をきらきらさせていた。

「幸ちゃは？」

洪作が訊いた時、その幸夫と亀男がそれぞれ大きな風呂敷包みを持って坂を上って来るのが見えた。幸夫は近付いて来ると、

「これ運ばさせられちゃった！」

と、照れた顔で言った。

「所長さんちのか」

「そうだ」

それから、

「色のばか白いおかしなあまっちょが来たぞ」

それから幸夫はまた照れたように言って頭を掻いた。多勢の村人が坂を上って来た。みな赴任して来た御料局の所長さんを出迎えに行った連中だった。幸夫の父親は御料局に勤めていたので、そんな関係で、幸夫の父親も母の顔も見えた。

洪作は道端に立って、一団の人たちが通り過ぎて行くのを見た。一団の人々の真ん中に所長さんの一家四人が挟まっていた。なるほど色の白い少女の姿が見えた。六年生だというが、もっと大きく見えた。三年生の弟も居た。これも色が白かった。洪作は二人の姉弟だけを注意していたので、彼等の両親がいかなる人物であるかということは見損ってしまった。一団のあとから、十人程の部落の子供たちがぞろぞろとつき従っていた。都会風の二人の色の白い姉弟を見た眼には、それらの部落の少年や少女たちは色が黒く取柄なく見えた。

明日から二学期が始まるという日の午後、所長さんの姉弟が母親に連れられて、突然、洪作の住んでいる土蔵を訪ねて来た。おぬい婆さんに呼ばれて洪作が階下へ降りて行くと、土蔵の前の柿の木の下で、二人の姉弟とその母は、おぬい婆さんと対^{むか}い合^あって立ち話をしていた。洪作はそこへ行^いって黙^{もく}ってお辞儀をした。

「いい坊ちゃんですね。洪ちゃんとおっしゃるんですか」

母親という人も色が白かった。洪作にはこの一組の母子が自分たちとは違った上等の階級の人間に見えた。

「明日からこの子たちも学校へ行きますから、御一緒にお願^{ねが}いしますね。雑貨屋の幸ちゃんにも、いまお願^{ねが}い

して来たところです」

母が話している間、二人の姉弟は洪作の方へ顔を向けていた。姉の方は人怯じしないのか、真っ直ぐに眼を洪作に当てている感じだった。洪作は二人の姉弟が、女と男の違いはあれ、全く同じ眼鼻だちをしているのに驚いた。併し、同じ顔はしていたが、姉の方は優しく、弟の方は強く見えた。洪作の方は相手の二人から眼を逸らせていた。

おぬい婆さんは、みんなをそこに待たせておいて、土蔵の裏へ盆柿を取りに行つた。洪作にはおぬい婆さんが前掛けの中へ入れて来た小さな果実が、所長さん一家の人たちへの贈りものとしては、ひどく貧相なものに見えた。盆柿は、普通の柿より早く実り、お盆の頃とることができるのでその名があったが、併し、何分小粒ではあったし、甘味も普通の柿には及ばなかった。柿は持つて来たが、相手がそれを包むものを持っていないことに気付くと、

「洪ちゃ、新聞紙を持って来ておくれ」

と、おぬい婆さんは言った。洪作は風呂敷が何かに包んでやるのなら兎も角、新聞紙に包んでやるのは何となく気がひけて厭だった。

「どこにあるか知らん」

洪作は言った。

「味噌樽の横にあらうが」

「知らん」

「あれさ、知らんことなからうに」

「だって、知らん」

洪作は死んでも新聞紙なんか持って来てやるものかと思った。すると、去年あたりから急に腰を折り曲げるのがひどくなったおぬい婆さんは、その深く折れ曲った背をみなに見せて、新聞紙を取るために土蔵へと一歩一歩危うく足運んで行った。

「あんた、何年生？」

姉が初めて口を開いた。

「五年生」

洪作は自分で顔に血が上って行くのが判った。洪作はそこから離れると、すぐ土蔵へ戻った。おぬい婆さんが盆柿を新聞紙に包んで差し出すのを見ている勇氣はなかった。

所長さんの母子が帰ってから、おぬい婆さんは、訪問者たちを褒めた。さすがに都会から来ただけあって、村の人たちとは人品が違うと言ひ、洪ちゃんもこれからはあそこの家の者たちと遊んだらいいと言った。洪作はあの色の白い姉や弟たちと一緒に遊ぶようなことが実際にできたら、それはどんなに素晴らしいことだろうと思つた。

新学期が始まると、全校生徒がその日のうちに転校生の姉弟の名前を覚えてしまった。姉はあき子、弟は公一と言つた。その日のうちに、転校生の顔さえ見れば、生徒たちは運動場ではやし立てた。

——アキ子ノアノ字ハアンボンタンノアノ字、コウ一ノコノ字ハコ芋ノコノ字。

洪作はみなからはやし立てられている姉弟を見ると、自分のことのように心が痛んだ。

その日学校が終つてから家の前まで来た時、二年生の次郎が、「アキ子ノアノ字ハ」と大声で唄いながら小川

で足を洗っているのを見た。洪作は次郎に烈しい怒りを感じた。次郎は生れつき病身で、いつも青い顔をしていて、ろくに友達もできない無口な子供であったが、洪作は黙って川の洗い場まで行くと、小川の中に突っ立っている次郎の頭を一つ二つ強く小突いた。次郎はよろめいて、よろめいた拍子に川の中に膝をついた。

次郎は何のためにいきなり頭を叩かれたかわけが判らなくて、一瞬ぼかんとしていたが、やがて殺されでもするように大声を上げて泣き出すと、川から上り、濡れた着物のまま往來を上家の上手にある自分の家の方へ駆け出して行つた。洪作は自分より三つも年下の病身の少年にいきなり手荒なことをしたことで胸が痛んだが、併し、その少年があき子と公一を傷つける歌を唄ったことはやはり許せない氣持だった。

その夜、土蔵へ次郎の父親が怒鳴り込んで来た。頭の禿げた五十ぐらいの人物は多少酒氣を帯びていた。

「なんでうちのがきを川の中へ突っ込んだか、そのいわれを聞かして貰いましょう」

「洪ちゃみたいに温和おとなしいのが、あんたのところのあんな青ぶくれに手を出すかいな。若し本当に洪ちゃがそんなことをしたんなら、そりゃ、あんたとこの次郎が悪いに決つとる。ちゃんと胸に手を置いて、お天道さんに訊いてみるこっちゃ」

おぬい婆さんも取けてはいなかった。階下の上り框がまちのところで、二人が烈しい言葉の遣り取りをしているのが、二階に居る洪作の耳にも聞えていた。洪作は大変なことになってしまったと思つた。聞えて来る言葉は次第に荒くなった。

「洪ちゃか何ちゃか知らんが、お前とこのがきを出せ。わしが本人に訊いてやる」

「お前みたいな酔っ払いに、洪ちゃを会わせられるかどうか、よく考えてみい。洪ちゃは大切な預りもんじや。ばかたれ」

それから何か水でもぶちまけたような烈しい音が聞えた。洪作は堪りかねて階下へ降りて行ってみた。すると、次郎の父親が頭から水を浴びせられて、濡れ鼠になって、そこに立っていた。おぬい婆さんがバケツの水をいきなり相手に浴びせたものらしかった。

次郎の父親は水をかぶって一度に酔いがさめたのか、

「ああ、世にも怖しい婆さがあるもんじゃ」

と、感に堪えぬような言い方をしてから、洪作に、

「洪ちゃ、早く豊橋の父ちゃんと母ちゃんのところへ帰るこっちゃ。こんな婆さんのところに居ると、生血吸われて死んじもうぞ」

そう言い残して、おぬい婆さんをとちめることは諦めて、土蔵あきらを出て行った。

二学期が始まって一週間程した最初の日曜日の朝、おぬい婆さんは洪作に、

「きれいな朝顔が咲いたから、所長さんの家へ上げておいで」

と言った。朝顔というものは七月か八月に咲くのが普通だったが、どういふものか、蔵の横手の朝顔は八月の終り頃から咲き始め、九月になってからも毎朝のように二つ三つ大きい花を咲かせていた。よく畑仕事へ出掛けて行く人が、小川の向うの畦道を通りながら、

「洪ちゃとこの朝顔はなんと奇妙な朝顔じゃ。これ、本当に朝顔ずらか」

そんなことを言った。そんなことが少しでもおぬい婆さんの聞くとところとなると、おぬい婆さんは決して黙

ってはいなかった。去年あたりから急におぬい婆さんは腰が曲り、腰が曲ると一緒に氣短かになっていた。

「本当の朝顔で悪かったな。ちよっくら降りて来てよおく見い。この花が朝顔というもんじゃ」

おぬい婆さんはそんなことを言った。確かに遅咲きの朝顔で、その点はまさしく奇妙な朝顔だと言えたが、併し、それは洪作の眼にも美しくみごとに見えた。部落の他の家の朝顔は大抵竹垣に蔓を巻きつけて、色の褪せた小さい花を咲かせたが、おぬい婆さんが丹精こめた朝顔は、大輪でもあったし、色も鮮かだった。

洪作は朝顔を所長さんの家へ持って行くように言われたが、何となくそうすることに躊躇を感じた。朝顔はどれも鉢らしい鉢には植わってはず、壊れたどんぶり鉢か、柄杓の柄のなくなったものに植えられてあった。朝顔を持って行くのはいいとしても、その植わっている器物が問題だった。

「どれ持って行く？」

洪作が訊くと、

「今日は一つしか咲いておらん。そのかわり、とびきりきれいなのが咲いた」

おぬい婆さんは言った。洪作はすぐ土蔵の横手へ廻ってみたが、なるほど眼の覚めるような藍色の大輪が一つだけ咲いていた。柄杓の柄の抜けたのに植わっている。洪作はおぬい婆さんの命令ではあるが、この間の盆柿の場合と同様に、所長さんの家への贈りものとしては、容れものの鉢が甚だふさわしからぬものと思えた。

「よそうよ」

「どうして」

「おかしいや、この鉢」

「おかしいなんて、洪ちゃ、ただでくれてやるんじゃ」

おぬい婆さんは言つて、

「所長さんとこの人たち、びっくりするぞ。これだけの朝顔、めったに見られやせん」

そう言われると、洪作も持つて行つてみたかも知つた。結局、洪作はその朝顔を持つて、所長さんの家へそれを届けるために往来へ出た。どこかで遊んでいた二三人の子供たちが駆け寄つて来た。

「洪ちゃ、どこへ行く」

一年坊主が言つた。

「御料局だ。ついて来い」

洪作は三人を供にして、御料局の門をくぐり、その一角にある所長さんの家へ近づいて行つた。

玄関の前まで行つた時、洪作は玄関の横手に仙人掌シヤボテンの植木鉢が二列にずらりと並べられてあるのを見た。大きい鉢もあれば小さい鉢もあった。どれも洪作の眼には上等の鉢に見えた。それを見ると、洪作は自分が手に持つてゐる朝顔が急に貧相な価値のないものに見えて来た。洪作は玄関の戸に手をかける氣持をすっかり失つてしまつた。

その時、家の横手から、思いがけず突然、あき子が姿を現した。

「あら」

あき子はそんな声を出した。洪作は今となつては逃げることもできず、

「朝顔が咲いたんで、ばあちやが置いて来いって——」

と、そんな言い方をした。自分はおぬい婆さんから命じられて、おぬい婆さんの使者としてこれを持つて来たのだ。これを持つて来たことには、自分の意志は少しもはいつていないのだ。そんな自分の立場を相手に理解

させたいための言い方だった。

「まあ、きれいだ！」

あき子は言った。眼を大きく見張って、いかにも朝顔の美しさに驚いたといった表情であった。洪作は血が顔に上って行くのを感じた。きれいな少女がきれいな表情をとったというただそれだけのことで、洪作は自分の顔が赤くなって行くのを感じた。

「アラ、マア、キレイ！」

お供の一年坊主が、あき子の言葉を真似てわざととんきょうな声を出した。

「帰ろう」

傍の少年に言うと、洪作はすぐあき子に背を向けた。

——アラ、マア、キレイ。アラ、マア、キレイ！

三人の子供たちは、歩きながら、同じ言葉を繰り返して、調子をつけて唄った。洪作はそんなことを唄う子供たちに、この間次郎に対したような怒りは感じなかった。それどころか、自分も亦、それを口に出してみたような誘惑を感じた。あら！と、大きく眼を見張った少女の表情は、それを思い出しただけで、洪作の氣持を遠くさせるものを持っていた。洪作は女生徒に対して、今までこのような感情を持ったことはなかった。多分に甘美で、どこかに秘密にしなければならぬような影を持った物哀しさがあった。亡くなった叔母のさき子に対する氣持とどこか似ているところもあり、違っているところもあった。